

陽気だより

養徳社 検索

ホームページからご覧いただけます
No.19 2008.10.15

第三号から

『陽気』は、昭和24年5月の創刊、平成21年に60年を迎えます。その足跡の一端を、昔の記事から振り返っていきます。

講演会でおちばの印象を語る吉川英治

歴史の上にかえりみて

私は、昨晚、奈良に一夜を寝かしていただきましたが、明けてみれば若草山のあたり、そこここに、桜の花が咲きみだれ、あるいはまた多くの人達が、朝早くから楽しそうに山のなかほどやふもとに遊んでいるのを見まして、はからずも、お互いに敗戦による惨憺たる物心両面の苦難を経た今日、こういうふうにあいつどい、楽しく花見などが出来るようになったということは、この三年間をふり返ってみて、涙の出るような気がいたします。

ことにわたくしは、この丹波市へはじめてまいりました



吉川英治 (よしかわ・えいじ) (1892~1962) 秘門家国民化の筆。『鳴門』、『宮本武蔵』、『新・平家物語』などの大作を執る。『神帖』、『な』作家と認められ、文学受章。

が、みなさんが、なんという明るい顔をしているのだろう、そうして、ここに和氣藹藹と一緒に楽しみ暮しているのだらうと、本心に心から驚きました。終戦後、私は全国各地の罹災の跡、あるいは戦災にかからない都市も方々旅行しましたが、まだこの町のようにおおらかに、陽気な明るい顔をしたところを、どこでも見たことがありません。

私は天理教の教理というものは、まだよくわかりませんが、しかしこの町を見まして、天理教は本当に、終戦後のこの日本において殊に大きな役目をしているのだ、この教理によつて、たしかにずい分多くの人がやすらかになりつつあるのだというところを感じたのであります。私は拝殿にのぼつて、みまして、ここでも非

常に美しいものをみました。それはみなさんが心からぬかづいて、おろがんでいる姿であります。人間が心からぬかづき、心から尊ぶことを忘れたぐらい情けないことはないものであります。戦争によつて、実に多くの損害を受けた中でも、もっとも大きな損失は、日本人が、お互いに尊敬しあうということを忘れた、これが一番の損失だと思ふのであります。尊敬するどころではない、反対にお互いに日本人が日本人を軽蔑している、さげすみあい、憎みあっている、——これこそわたくしは、なにもものにもかえられない大きな不幸であると思つております。いつの日かわれわれのこの日本に、日本人がお互いに敬しうやまう日が来るだらうかと思つていました。が、今日、あの拝殿でぬかづいて、今日、みなさんがたをみ、また、こういうふうにも多数寄りつどつて、実をみて、実に嬉しく感じました。

さげすむことのひどさ、ああ実にやりきれないという気持ちでしたが、では、いったいこれはどこからきているのだらうかと、歴史の上で少々らべてみましたら、やっぱり敗戦後の日本の状態と同じようなことが、遠い昔にも、いくたびかあったことが歴史の上のこつています。今から約七、八百年前の、寛喜年間の大飢饉の日本の姿が、ちょうど今日の有様に彷彿しているのです。

実は私も終戦後、世間のことを見聞きするのが面白くないので、自分の書斎ばかりに閉じこもつて、この三年間なんにも書いていなかったのですが、その間にふと、ご承知の歌よみで有名な藤原定家の「明月記」という、克明に書いた日記を読んでみますと、寛喜年間のくだりに、おやおやと思われくんだりがあります。

(昭和二十四年四月二十日)

於天理教館 文責在記者



秋祭の日

十月は「秋祭り」の季節。天理の石上神宮では十月十五日に「例祭（ふるまつり）」が催される。『日本書紀』（七十二〇年に完成）に記された神宮は、伊勢神宮と石上神宮だけということであるから、日本最古の神宮と言える。

明治十三年、その石上の秋の祭りの日に、同じく石上で開催された「舞ざらえ」（発表会）に師匠と舞の友だちと参加した帰りに、友だちの叔母さんに案内されて教祖にお目にかかった女性―昭和二十

八年九月で八十四歳の上田ヨシさんの話である。（教祖の御姿を偲ぶ）改訂新版・上村福太郎著より

―教祖は、南向に建っていた門屋を入ってその門屋の中の西側の十畳ほどの間の南側の窓の下の長持のような台（長さ七尺、横三尺、高さ三尺二寸位の台 一尺は三〇・三センチ）の上で、赤い着物をお召しになって、赤い蒲団の上にちよんとお座りになってにこにこしておられました。教祖の横に私と同年（十歳）というよりちよんと大きいぐらいの黒い着物を着た

品のよい丈夫そうな男のお子が座っていました。（筆者は、この年数え十五歳で養子となられた初代真柱ではないかと書いている）

教祖は綺麗な皺のあるお顔でした。そして、本当に優しいお声でした。にこにこなさされて、「さあさあ舞をもうておくれ」と申されましたので、私たち三人は順番に一人ずつ舞をまいりました。私は扇を持って、「紀伊の国」という舞をまいりました。舞い終わりますと教祖は、「舞子さん、舞子さん、ようもうておくれた。上手上手こ

『陽気』 創刊60年 記念行事及び特別企画

『陽気』は昭和二十四年五月の創刊号から数えて、明年平成二十一年で創刊六十年を迎えます。読者各位の日頃のご愛読にこたえ、あわせて文書布教の一環として、左記要項にて記念行事と特別企画を推進いたします。読者各位のいっそうのご愛読とご参加をお願い申し上げます。

期間 平成二十一年一月号より十二月号まで（五月号は記念号）
企画行事 創刊六十年記念講演会（平成二十一年四月二十五日）
道柳のつどい（選者を囲んでの懇親会・平成二十一年秋開催予定）

本誌新企画 著名人による天理紀行（随時掲載） 創刊六十年記念懸賞小説募集
連載随想『天理今昔物語』（天理大学名誉教授・近江昌司氏）
連載漫画『ひのき家の人々』（金巻とよじ氏）

再録・六十年間の『陽気』から（先人のおたすけ話、著名人の記事）
『陽気』と私（随時）

出版企画 新刊本 読者が作る『お道の人のちよんといひ話』（仮題）
復刊本 『道の八十年』（松村吉太郎著）
『たすかる名人』（仮題）―柏木庫治おたすけ話・対談

読者各位

養徳社社長 今村俊三

原稿募集 読者が作る本

あなただけの“とっておきの話”をお寄せください

ふと思いだすたびに心に小さな灯がともるような話。信仰にまつわる話から日常の何気ない出来事まで、題材は自由です。温かい、小さな灯を読む人の心にも映してほしいのです。

応募資格 ようやく

応募規定 字数は800字以上1500字以内、ほか。

採用作品は平成21年、『陽気』創刊60年の年に単行本として刊行の予定。締切り 平成20年12月31日

※詳細は、「陽気」10月号の62Pをご覧ください。



例 祭 平安後期（1081年）に白河天皇の勅使が参向し、走馬十列を奉納した故事に始まるといわれる。田町の“御旅所”まで御鳳輦（ごほうれん）上の写真）に、甲冑武者・供奉者に扮した壮麗な行列が続く。

ちへおいで。上手にもうてくれたんで、だちんをあげよ」とおっしゃいました。それはそれは優しいお声でした。お手ずから一重ねで二合ぐらいの紅白のお鏡餅とそれにお砂糖の入ったはったい粉を紙に包んで下さいました。

養徳社 よもやま話

○月○日 社内旅行が初秋にありました。行き先は西伊豆。車中ではリラククスしてビールを飲み、互いによもやま話に花が咲きました。と突如、高速は渋滞。尿意を催しても、マイクロボスの動く気配はなし。さあ大変！次のサーブエリアまでと奮闘するが我慢も限界……。運転手さんをお願いしバスの横陰で用を足す事に。忘れられない旅の一頁になりました。

○月○日 「陽気」が来年創刊六十年を迎えるにあたり、横断幕を社内貼り、雰囲気盛り上げようということになりました。

そこで、天理の居酒屋の看板も書き散らしている、書好きの社員が悪戦苦闘、やっと書き上げました。躍動感溢れる墨字は圧巻です！ 因みに作品を書き上げた時のBGMは、社内旅行で訪れた地、石川さゆりの「天城越え」だったとか。その出来栄をぜひ、ご覧下さいませ！

広告を載せませんか

ようぼくの企業や会社の広告を『陽気』誌へ載せてみませんか？ 掲載料金は、広告の大きさによって異なります。料金は、記事中で一回二万円から。

詳しくは養徳社広告係まで
☎0743・62・4503

この「陽気だより」を各支部例会などの折、広く養徳社からのお知らせとしてご利用ください。ますよう、お願い申し上げます。

養徳社